

《亀蔵ヤマモモの原木》

土佐は、阿波と共にヤマモモ（楊梅）の名産地で、特に十市のヤマモモは、全国一の美味を誇っている。中でも亀蔵ヤマモモの味は特別で、ヤマモモといえば亀蔵ヤマモモと言われるくらいである。梅雨のころに熟する、ピロロドのような黒赤色の果実は、独特の

味を持っている。ヤマモモは土佐の花に選ばれているが、それは花自体が美しいのではなく、郷土の花という意味から名付けられたものである。

亀蔵ヤマモモは、幕末のころ、十市人形谷の島田亀蔵が原木を発見し、接木して繁殖につとめ、今

目のように広く栽培されるようになったと言う。原木は亀蔵の子孫の島田正実氏所有の山林にあり、回りが一・五畝、高さ十畝、樹齢二百年を越えている。原木のそばに次の碑が、有志の力で建立されている。

わが里の ももの祖木ぞ 標結
うて いく寿しかれと 祈る
なりけり
昭和四十六年七月十一日

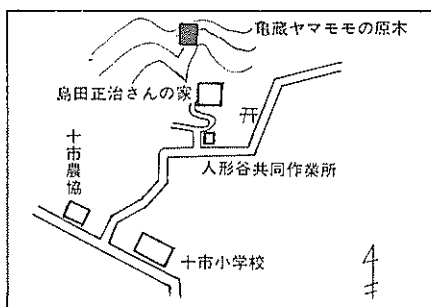
有志建立

亀蔵の墓碑は、すぐ原木の下方にあり、文久三年（一八六三）三月十日に死んでいる。

明治時代のこと、お銀という美



樹齢200年を越す亀蔵ヤマモモの原木
(十市人形谷で)



私は、亀蔵の兄である圓次の五代目にあたります。



十市人形谷に住む
島田正治さんの話（写真）

人で、ヤマモモ採りの名人がいた。当時ヤマモモは各地に行商されたものだが、
「お銀のちぎったヤマモモエ」の掛け声が街に田舎にこだましたのも、この頃の事であったが、今では行商する姿はすっかり見られなくなった。

亀蔵は分家をし初代になりましたが、お墓がなく兄の圓次のところに葬られました。ところが、亀蔵の妻は、それよりずいぶん遅れ明治になって亡くなったので、下段のところに新しくお墓がつくられ、そこが代々の墓となりました。しかし、夫婦を別々に置くのもかわいそうと思い、亀蔵の墓を下段へ移そうとしたところ、お坊さんが「夫の墓を下へ持つていくのではなく、妻の墓を持つて来なければならぬ」と言われ、亀蔵の墓の隣に移したのが、四、五年前のことです。

亀蔵ヤマモモの原木は、幹も空洞になっており、ようよう息をつけないでいる状態ですが、子どもころは、枝葉が四方に広く張り、たくたんの実を付けていました。昭和十二年のこと、嵐で東側に延びていた太い枝が折れてしまったことを、はつきり覚えています。

十市には、中山という種類のヤマモモもあり、亀蔵より早く熟れ味も良いですが、日持ちが悪いのが欠点です。また、徳島の方でヤマモモが多く栽培され、大阪へも出荷しているというので見学に行きましたが、とてもおいしいとは言えない味です。やはり、実も大きく味も良い亀蔵ヤマモモが最高です。